

Gerring, J. (2017) *Qualitative Methods*, in *Annual review of political science*, 20(1), 15-36.

ジョン・ゲリング(2017) 「定性的手法」政治学年報 20(1), 15-36.

➤ 紹介文

本稿は、比較政治並びに定性的方法論を専門とするジョン・ゲリングによる、定性的手法と定量的手法に関する研究者間の議論を検討したレビュー論文である。定性・定量的研究それぞれの定義を確認したうえで、両手法の差異と親和性に関する論点が提示される。

● 概要

本論文は大きく分けて二部構成となっている。前半部では、定性・定量研究の区分について両者の定義を厳密に検討した上で、両手法の差異並びに親和性に関する論点を提示している。本論の後半部では、主に定性的研究の分野における事例選択、事例分析の位置付けについて検討が行われる。

● イントロダクション(15-6 頁)

- ・ 現代に通用する定性的方法(Qualitative methods)は、19 世紀に活動したジョン・スチュアート・ミル (1843/1872) の研究から生まれた。またこうしたミルに代表される研究者たちは、量・質といった区分を重要視せずに「科学」を探究した。
- ・ しかし、20 世紀に入ると定性的方法と定量的方法の間に二分化が生じた (Platt 1992)。定量的手法を取り入れたのは自然科学や経済学に代表される分野であり、定性的手法を重んじたのは人文科学であった。またこれらの中に位置する分野として社会科学が位置付けられ、そこでは量と質の違いに注意が払われるようになった。

● 質と量(Qual and Quant) (16-7 頁)

- ・ 質(Qual)と量(Quant)の区分については、学問領域ごとに見解が異なる。定量的研究を行う学者にとって、科学とは同じような規則と前提に従った一元的な営みであり、量と質に区分されない単一の推論の論理に基づいている。この一方で、定性的研究では量と質を区分して捉える傾向があり、方法論や研究上の目標に関わる多様性が確保されてきた。
- ・ しかし、上述した質と量の類似性と相違点、両者に共有された基準、あるいはそれらが社会科学研究をどの程度律すべきか必ずしも明確にされてこなかった。
- ・ 本稿では、負荷の高い概念(一元論と多元論、探究の論理、認識論、通約性、自然主義、

解釈主義等)の代わりに、「定性的」「定量的」とは何かという定義の問題に焦点化する。こうした定性と定量に見られる区別がもたらす影響と、定性・定量的方法に関わる論争をいくつか解決するための暫定的な結論を導き出したい。

● 定義 (17-19 頁)

- ・ 定性的と定量的という言葉は、連続体として捉えられることもあれば、明確な境界を持つ概念としても捉えられるが、通常では両者は正反対の概念(polar concepts)として理解されている。例えば定性的研究(Qualitative work)は、自然言語での表現、少量のサンプル、意図的なケース選択といった研究上の特徴を有している。これに対して、定量的研究(Quantitative work)は、数値や統計モデルでの表現、大規模 N 解析、ランダムサンプリング、より大きな集団への一般化という特徴を有している。
- ・ 上記に見られるように両者の特徴が多次元であるため、定性・定量に関するテーマは捉えどころがなかった。こうした課題を踏まえ、定性・定量的研究に方法論的な明確さをもたらすには、両者を明確に区切り、他に確立された用語に踏み込まない最小限の定義に到達する必要がある。
- ・ 本稿では、「定性」「定量」に見られる両者の概念を以下のように定義する(gerring 2017: 18 頁)。

◇ 定性的研究とは、比較不可能な観察—原因または記述的問題に関わる異なる要素の観察—を行うこと。

E.g. 探偵小説における犯人を特定するための諸要素 ((1)動機、(2)犯行時の容疑者の場所、(3)第二の容疑者の存在)。これらの異なる手がかりはマトリックスのデータセットにならないため比較ができず、物語分析(narrative analysis)のような手法で扱わなければならない。

◇ 定量的研究とは、(どのような次元であれ) 比較可能な観察を行うこと。

E.g. 定量的分析は、観測値の行列に見られる共分散のパターンを列挙し、通常形式的なモデル(集合論/質的比較分析、頻度統計、ベイズ確率、無作為化インファレンス、合成制御など)内でそれらを分析し、記述的または因果的推論に到達させる。

- ・ 以上の定義を踏まえると定性・定量的分析とは、どちらか一方のデータに基づいて行われる推論を意味する。(a qualitative or quantitative analysis is, accordingly, an inference that rests on one or the other sort of data)
- **定性・定量的データの非対称性 (19-20 頁)**
 - ・ 上述した定性的データ(qualitative data)と定量的データ(quantitative data)の間には非対称性がある。インタビュー、写真、エスノグラフィック・ノート等の収集された定性的データは、コーダーによる判断や数学的アルゴリズムによってコード化され、定量的データに変換が可能となる。しかし、ある情報をマトリックスで表現すると、その観察に付随していたユニークな側面が失われるように、定量的データを定性的データに変換することはできない。
- **定性・定量的研究の親和性 (21 頁)**
 - ・ これまでの議論から定性的データと量的データの有用性は、研究者の目的によって異なる可能性があることがわかる。特に定性的研究は、対象についてあまり知られておらず、研究者の目的が新しい概念の構築、新しい仮説の発見、未知の因果関係の解明といった、探索的な段階や事例に基づく研究において特に有益であることが多い。
 - ・ また定量的研究においては、理論的関心のある因果的要因(以下 X と表記)と結果(以下 Y と表記)の間に因果関係があるとされるものの、X と Y を結びつけるメカニズムが不明となる場合がある。このような状況において定性的研究は、定量的な分析で検証される可能性のある潜在的なメカニズムを示唆する、探索的な役割を担っている。
- **事例の選択 (21-4 頁)**
 - ・ 事例ベース分析(case-based analysis)には、(たとえ定量的な観察が含まれていたとしても)必ず定性的な観察が含まれていることが分かっている。そのため事例の選択というテーマは定性的分析の中心を占めている問題であると言える。(互いに比較可能な事例、また理論的に関心のあるより大きな母集団に関する事例を選択しようとする限り定量的といえる。)
 - ・ こうした事例選択がいかなる基準で行われるのかについて、以下では定性的研究における事例選択の戦略に関する類型を確認する。

Table 1 Case-selection strategies

Goals/strategies	N	Factors	Criteria for cases	Examples
I. Descriptive (to describe Y)				
Typical	1+	<i>D</i>	Mean, mode, or median of <i>D</i>	Lynd & Lynd (1956 [1929])
Diverse	2+	<i>D</i>	Typical subtypes	Fenno (1977, 1978)
II. Causal (to explain Y)				
a. Exploratory (to identify H_X)				
Extreme	1+	<i>X</i> or <i>Y</i>	Maximize variation in <i>X</i> or <i>Y</i>	Skocpol (1979)
Index	1+	<i>Y</i>	First instance of ΔY	Pincus (2011)
Deviant	1+	<i>Z</i> , <i>Y</i>	Poorly explained by <i>Z</i>	Alesina et al. (2001)
Most similar	2+	<i>Z</i> , <i>Y</i>	Similar on <i>Z</i> , different on <i>Y</i>	Epstein (1964)
Most different	2+	<i>Z</i> , <i>Y</i>	Different on <i>Z</i> , similar on <i>Y</i>	Karl (1997)
Diverse	2+	<i>Z</i> , <i>Y</i>	All possible configurations of <i>Z</i> (assumption: $X \in Z$)	Moore (1966)
b. Estimating (to estimate H_X)				
Longitudinal	1+	<i>X</i> , <i>Z</i>	<i>X</i> changes, <i>Z</i> constant or biased against H_X	Friedman & Schwartz (1963)
Most similar	2+	<i>X</i> , <i>Z</i>	Similar on <i>Z</i> , different on <i>X</i>	Posner (2004)
c. Diagnostic (to assess H_X)				
Influential	1+	<i>X</i> , <i>Z</i> , <i>Y</i>	Greatest impact on $P(H_X)$	Ray (1993)
Pathway	1+	<i>X</i> , <i>Z</i> , <i>Y</i>	$X \rightarrow Y$ strong, <i>Z</i> constant or biased against H_X	Mansfield & Snyder (2005)
Most similar	2+	<i>X</i> , <i>Z</i> , <i>Y</i>	Similar on <i>Z</i> , different on <i>X</i> and <i>Y</i> , $X \rightarrow Y$ strong	Walter (2002)

Abbreviations: *D*, descriptive features (other than those to be described in the case study); H_X , causal hypothesis of interest; $P(H_X)$, the probability of H_X ; *X*, causal factor(s) of theoretical interest; $X \rightarrow Y$, apparent or estimated causal effect; *Y*, outcome of interest; *Z*, vector of background factors that may affect *X* and/or *Y*.

出所) Gerring (2017 : 22 頁)から引用。

◇ I. 記述的(Descriptive)

記述的なケーススタディは、因果関係に基づく仮説を中心に構成されているわけではない。研究者はケースの選択について必ずしも明確にはしていないが、一般的なパターン（典型）またはパターン（多様）を例示する1つまたは複数のケースを特定することを目的としている。

◇ II. 因果的(Causal)

上記以外のケーススタディは、主に因果関係の分析に重点を置いている。以下では因果的なケーススタディにおける三つの目的について要約する。

a. 探索（仮説の確認）

仮説を明らかにすることを目的とする。研究の目的は、Yの原因として考えられるXを特定することにある。

b. 推定（仮説の推定）

因果関係の推定により仮説の検証(test)を行うことを目的とする。XがY

と正の関係を持つか、負の関係を持つか、または関係を持たないかについて検討を行う。

c: 診断 (仮説の評価)

診断的ケーススタディは、あるテーマに関する文献や研究者自身の考察から得られた仮説を確認、否認、または改良し、その関係において働いている生成主体(メカニズム)を特定するのに役立つ。事例の選択戦略とは、表1に示すように影響力のあるもの、経路のあるもの、最も類似したものに分類される。

● 事例分析：定性的データを用いた因果関係の推論 (24 頁)

- ・ 事例選択を踏まえた上で以下では事例分析に焦点化する。具体的には、定性的データで因果関係を推論することは可能か、という最も論争的な側面について検討する。

◇ ① 大まかな方法(Rules of Thumb)

過去数十年に渡り、研究者たちは因果関係の推論を目的とした定性的調査の過程において、一連の緩やかな枠組み(a set of loosely framed rules)を特定した。しかし、以下に挙げた枠組みが非公式なものであるため、納得のいく推論とはどのようなものなのか、またどのようにすれば納得のいく推論ができるのかについては不明瞭となっていた。

E.g. 情報源の分析、新しい原因因子や理論の特定、対抗仮説の検討と有利な仮説の構築、検証可能な仮説の設定、反実仮定の思考実験、年表やダイアグラムを活用した時間的・因果的相互関係の明確化。

◇ ② 推論フレームワーク

上述の状況を改善するために、近年の多くの研究は定量的研究の分析枠組みに定性的研究をはめ込もうと試みてきた。こうした研究潮流では、統一的な探求の論理が存在するという一般的な因果関係の枠組みの中で定性的研究が理解されている点が重要である。

E.g. 集合論 (Mahoney 2012, ; Mahoney & Sweet Vanderpoel 2015)、非循環グラフ (Waldner 2015b)、ベイズ推定 (Beach & Pedersen 2013 : 83-99 頁 ; Bennett 2008, 2015 ; Crandell et al.2011 ; George & McKeown 1985 ;

Gill et al.2005 ; Humphreys & Jacobs 2015, 2018 ; McKeown 1999 ;
Rohlfing 2012 : 180-99 頁)

◇ ③クラウドベースのアプローチ

特定の事例に関する詳細な定性的分析とそれに基づく結論が、ある研究者の見解を示すものであり他の研究者の見解とは大きく異なる可能性がある。こうした知見の正当性に関わる問題については、極めて特殊な問題に対して知識を有する専門家の小さなコミュニティを作成するという、クラウドベースのアプローチ(crowd-based approach)で克服することができる。

◇ ④ 混合手法研究 (multimethod research)

同じ一般的な研究課題に対して、定性と定量両方のエビデンス(evidence)を用いる混合手法研究はますます一般的になっている (Brewer & Hunter 2006, ; Goertz 2017 ; Harrits 2011 ; Lieberman 2005, ; Seawright 2016b)。こうした混合手法においては、定量的分析は因果効果を測定することに重点があり、定性的分析が因果メカニズムを特定することに重点があるように、両者の研究スタイルは目的が異なるため直接的に対立することはなく相互補完的に有用な情報を提供しあう。

● 結論

- ・ 本稿ではまず定量的研究と定性的研究の定義について検討した。定量的研究であれば、観察結果のマトリックスに見られる共分散のパターンを列挙し、正式なモデル内で分析し、記述的または因果的な推論に到達する。この一方で定性的研究では、比較不可能な観察の断片に基づく推論が行われ、伝統的に非公式な方法で分析される。
- ・ の差異と親和性について、両者事例選択戦略の類型を示したことによって、事例選択の方法は既存の研究が示唆するよりもかなり分化していることを暗黙のうちに論じた。
- ・ 因果関係の推定を目的とした定性的データの適用について、大まかな方法から始まり、集合論、非循環グラフ、ベイズ確率といった一般的な枠組みに至るまで論じた。これらの一般的な枠組みは因果関係を推論する上で、定性的観察と定量的観察を統一的なフレームワークに組み込むことができることを示している。しかし、質的な探求を行うための実用的なツールはまだ提供されていない。
- ・ 混合手法研究に関する検討を行うことで、当該アプローチが定量的研究と定性的研究

の対立を解決する妥当な方法であることを主張した。

- ・ 本稿全体の結論として、発見（探索、革新）の文脈と正当化（評価、実証、証明、検証／改竄）の文脈との間の基本的なトレードオフの存在（Reichenbach 1938）を指摘する。両者とも科学の進歩に不可欠であると認識されているが、正当化の作業は体系的なルールに従い、学術誌に発表し、教科書にまとめ、講義で教えることができる一方で、発見に関わる作業は比較的無秩序なものとなる。新しいものを発見するためのルールはなく、経験則や類推、アドバイスといった非公式なものはあるかもしれないが、それをもとに学問分野を構築できるようなものではない。こうした二項対立の存在は、定性的研究の核である探索的役割(新しい概念、仮説、分析の枠組みの発見)という特徴を示すものである。